

第3回 次世代へ光り輝く「教育立県ちば」を推進する懇話会(2018.10.15)

協議 (2) いじめ不登校防止 (意見発表: 保坂発言要旨)

① 不登校問題

(1) 千葉県の特徴: 歴史を繙く

長期欠席対策=千葉県教育委員会の重点政策(1956年度~)

『長期欠席の子どもたち』(昭和32年度教育資料第3号)千葉県教育研究所

銚子市教育委員会の実践(1952~56年度)

1. 長欠対策教員(県教委加配1名)=現在の訪問担当教員(12名:資料集p7)
2. 研究(補導)学級設置(専任教員配置)=現在の校内適応支援教室(資料集p98-100)
3. 月例報告(長期欠席児童生徒状況報告:資料集p60-61)=長期欠席調査の原簿

不登校対策支援チーム(資料5-4)

(2) 長期欠席(不登校)生徒のグレーゾーン: 上記2,3に関連して

欠席30日未満、学校に来て教室には入れない児童生徒(出席)

月例報告の利用による実態調査(資料集p130)

(3) 不登校問題の新たな動向

義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律(2017年)

各都道府県に1校以上夜間中学を設置

「夜間中学校の設置・充実に向けて(手引き)」(第2次改訂版)平成30年7月

夜間中学校の事例=市川市立大洲中学校、松戸市(2019年開講予定)、柏市

(4) 子どもの貧困問題: 児童福祉関係機関出向者(2002年度~)の組織的活用

欠席と貧困の重なり: 「脱落型」(経済的不安定層)

年間10日以上欠席児童生徒のうち約6割(2006年調査)

子どもの貧困対策に関する大綱(2014年閣議決定): 小中高12年間の長期支援

学校=子どもの貧困対策のプラットフォーム、総合的対策の推進

教育の支援(学力保障、福祉との連携、就学・進学支援等)

スクールソーシャルワーカー(SSW)の配置

第2期 教育振興基本計画 施策17「学びのセーフティネットの構築」

「福祉部門等と連携しつつ、経済的・家庭的理由など様々な困難に対応」

② いじめ問題

「いじめ防止対策研修会」、「いじめ問題対策リーダー養成研修」(資料5-1-2)から

2つの懸念

1. 第三者委員会の整理(重大事態への対処:資料5-2-2)
2. 児童生徒の仲間関係の発達(「豊かな人間関係づくり実践プログラム」等:資料5-1-2)

0 はじめに

「いじめ」か「対人関係のトラブル」か? / 加害者と被害者?

平成 26 年度調査見直し:都道府県別データと岩手県矢巾町の中2自殺事件が契機

「いじめの認知件数の多い学校」=「極めて肯定的に評価」

『平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の一部見直しに

ついて(依頼)』文部科学省初等中等局生徒指導課長(発) 平成 27 年

「学校は『いじめ』という言葉を使わずに指導するなど柔軟な対応も可能」

『いじめ防止等のための基本的方針』平成 29 年

1 総論

(1) 時代認識: 社会及び学校教育の変化をどうとらえるか?

2015 年=「戦後 70 年」、2018 年=明治維新 150 年

さらに長いスパン=世紀を超えた大転換期?

資本主義の最終局面=400 年ぶりの大転換期

(水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書)

「豊かな国と貧しい国」という二極化から「貧富の二極化が国内で現れる」

印刷技術(15 世紀グーテンベルグ)と出版革命(16 世紀マヌーツイオ:注 1)から

IT 革命(20 世紀)へ

情報(=知識の獲得)は神の独占、国家の寡占から一般大衆へ

知識の蓄積(記憶)から外注化

これに伴う学校教育の変化は?

学校教育=「子ども」から「大人」への移行支援

(2) 学校の役割=「子ども」から「大人」への移行支援

初期共同社会における「イニシエーション」=通過儀礼

「子ども」は一夜にして(あるいは数日、数週間かけて)「大人」。

ある時点から明確に線が引かれて「大人」になるという非連続的な発達観。

「子ども」と「大人」が質的に違うもの、段階的・飛躍的な移行。

移行期間の登場

① 中世身分制社会の徒弟制

「子ども」= 6,7 歳まで、話し言葉で十分な時代。

② 近代市民社会の学校

「子ども」期の延長と学校制度の登場=資本主義(市民社会・国民国家)の成立

学校教育=「大人」になるための「読み、書き、そろばん」の習得が必要となる。

「子ども」=「読み、書き、そろばん」ができない

「大人」=「読み、書き、そろばん」ができる

産業社会の登場による児童労働からの保護(収容)=福祉機能

「学び」(学校教育)とは?

学習指導と生活(生徒)指導 / 学習領域と対人関係、コミュニケーション能力

現在の日本社会では何ができることが「大人」か?

(3) 学校教育を考える3つの切り口

① グレーゾーン化:「子ども」と「大人」

総務省 ICT(情報通信技術)分野の研究支援＝年齢制限の撤廃!

② 個別への援助: 集団指導場面の減少、救急救命

③ 専門家の役割: 地震予知(注2)、放射能汚染問題

2 子どもの心理発達

超自我と自我のバランス(図)

3 仲間関係の発達

(1) 思春期とは?

思春期は生物学的定義＝第二性徴(初潮、精通)の発現

大人になるまで心理的成長と身体的成長のギャップ: 不安定な時期

仲間関係の重要性(←親や教員＝大人に頼れない)

自立に伴う不安と痛みを共有できるのは仲間関係

その中で「いじめ」? →「人間関係のトラブル」

(2) 仲間関係の発達(資料参照)

① ギャング・グループ gang-group (児童期後半)

ギャング・エイジ

権威に対する反抗性、他集団に対する対抗性、異性集団に対する拒否性

仲間集団の承認が、家庭(保護者)の承認より重要

同一年齢による一体感(凝集性)

大人がやってはいけないということをやる(ルール破り)

② チャム・グループ chum-group (思春期前半)

チャム(chum:親友)

仲良しグループ＝同じ興味・関心や部活動などを通じて結びつく

互いの共通点・類似性を言葉で確かめ合う「私たちは同じね」

仲間内でしか通じない言葉(符丁)

仲間に対する絶対的忠誠心＝同調性

③ ピア・グループ peer-group (思春期後半)

ピア 仲間(同等の)・同僚

「私たちは互いに違うけど、でも、友だちだよ」互いの異質性を認め合う

違いを乗り越えたところで、自立した個人として、互いを尊重しあう

異質性を認めることから、男女混合・年齢にも幅

日本の学校では、

小学校(高学年)時代 ギャング・グループ

中学校時代 チャム・グループ

高校時代 ピア・グループ

(3) 留意点

① 同調性と同調圧力

ギャングやチャムの段階では仲間集団が同一であることが絶対的条件

同調性のピークは11～13歳、6～8人

男子よりも女子の方が高い

ただし、危険性が高いのは男子(10代の仲間だけの運転)

- ② 同一であることを確認するためにゲーム的仲間外し
＝短期間に順繰りに仲間から外すローテーション型の「いじめ」
「対人関係のトラブル」自体は、心理的成長に必要？
暴走＝特定の子どもに対しての固定化・長期化・陰湿化は許さない！
- (4) 仲間関係の変質
 - ① ギャング・グループの消失？ というより中学以降に移行？
塾通い・お稽古事など忙しい小学校高学年
戸外で友だちと一緒に遊ぶ機会がない
 - ② チャム・グループの肥大化
ギャング・グループを充分経験しないまま
表面的「群れ志向」的チャム・グループを形成
自分たちだけでは集団の凝集性が保てない
「いけにえ」を一緒にいじめることで集団を維持
 - ③ ピア・グループの遷延化(思春期の遷延化)
仲間に対して意見の相違や否定的な感情をも伝える誠実さが必要
 - ④ 発達加速現象による「前思春期」の短縮(消失)
第二次性徴前＝思春期前の意味
自我(現実判断能力)の成長
現在は思春期が前倒し(＝発達加速現象)

4 まとめ:学校の役割を見直す

学習指導と生活(生徒)指導

注1:イタリアの歴史学者マーニョによれば、実際の出版革命は16世紀ベネツィアで活躍したマヌーツイオという一人の天才(イタリック体や句読点の考案者)によるものだという。私たちが歴史で学ぶのは「印刷技術はグーテンベルクによる発明」であるが、この出版革命については教科書にすら記載されていない。現在進行中のIT革命は、百年後には誰の名前が歴史に残って教科書(まだ使われていけば、であるが)に記載されるのであろうか。A.M.Magno(清水由貴子訳)『そのとき、本が生まれた』柏書房(2012)

注2:2009年に300人以上が死亡したイタリア中部ラクイアの地震の際、事実上の安全宣言で被害を広げたとして6人の地震学者と政府防災局副長官(当時)が過失致死罪に問われた。7人は地震発生の6日前にあった政府防災局主催の検討会に出席。群発地震が続いていたが、「大地震の予兆する根拠はない」とし、防災担当副長官は「安心して家にいていい」と述べたとされる。一審は7人全員を禁錮6年の有罪としたが、二審では地震学者6人が逆転無罪となった。一方、防災担当副長官は禁錮2年の有罪(執行猶予付き)。この事件は、「わからない」と言うことが必要な21世紀科学の専門家の役割を象徴している。(朝日新聞2014年11月5日「地震学者の結果責任は? :イタリアで逆転無罪判決」)

文献:保坂 亨『いま、思春期を問い直す:グレーゾーンにたつ子どもたち』東京大学出版会(2010)

資料: 思春期の仲間関係の発達

保坂亨『いま、思春期を問い直す：グレーゾーンにたつ子どもたち』より

子どもたちの発達上の大きな課題として保護者からの自立があり、言うまでもなくそれは誕生以来続く長いプロセスに他ならない。とりわけ学校教育に関わる児童期から思春期にかけて大きな心理発達上の課題となってくる。それまで保護者との関係(家族)が重要な安定基地であった子どもにとって、仲間関係がそれにとってかわり、家族という集団より仲間という集団の方が大切になってくる。この子どもたちの仲間関係、とりわけ児童期から思春期にかけての仲間関係について、以下のような仮説的なモデルが考えられる。

1 仲間関係の発達

- ① 児童期後半の gang-group : 児童期後半、保護者からの自立のための仲間関係を必要としはじめる時期に現れる徒党集団、従来の発達心理学ではギャング・エイジ(gang age)と呼ばれていた集団である。この集団では特に同一行動による一体感が重んじられ、同じ遊びをいっしょにするものが仲間であると考えられる。この同一行動を前提とした一体感(凝集性)がもたらす親密さは、相手を丸ごとそのまま受け入れる状態とってよいだろう。したがって、遊びを共有できないものは仲間からはずされてしまう。この段階に至ってようやく仲間集団の承認が家庭(保護者)の承認より重要になってきて、大人(保護者や教師)がやってはいけないというものを仲間といっしょにやる(=ルール破り)ことになる。「ギャング(=悪漢)」といわれる所以である(この集団は基本的に同性の同輩集団であり、どちらかといえば男の子に特徴的にみられるとってよいだろう。)
- ② 思春期前半の chum-group : 思春期前半によくみられるなかよしグループである。この語源ともいべき chum(親友)は、こうしたグループから生まれた特別に親密な友人を指している。精神科医のサリバン(Sullivan, 1953)はこの段階の友人関係をとりわけ重視し、それが児童期までの人格形成上の歪みを修正する機会になることを指摘した。この段階では、同じ興味・関心やクラブ活動などを通じてその関係が結ばれる。ここでは互いの共通点・類似性(例えば同じタレントが好き)を、言葉で確かめ合うのが基本になっている。彼ら・彼女らの会話を聞くと、その内容よりも「私たちは同じね」という確認に意味があることがわかる。そして、よくその集団内だけでしか通じない言葉(=符丁)を作り出し、その言葉が通じるものだけが仲間であるという境界がひかれる。gang-group の特徴が同一行動にあるとするならば、この chum-group の特徴は同一言語にあるといえるだろう。そして、この言語による一体感の確認から、仲間に対する絶対的な忠誠心が生まれてくる。(この集団も gang-group 同様、同性の同輩集団であるが、どちらかといえば女の子に特徴的にみられるとってよいだろう。)
- ③ 思春期後半の peer-group : やがて思春期後半、上に述べた gang-group や chum-group としての関係に加えて、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係が生じてくる。ここでは共通点・類似性だけではなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、

他者との違いを明らかにしつつ自分の中のものを築き上げ、確認していくプロセスがみられる。そして、異質性を認め合い、違いを乗り越えたところで、自立した個人として互いを尊重し合って共にいることができる状態が生まれてくる。(なお、この集団は、異質性を認めることが特徴ゆえに男女混合であることも、年齢に幅があることもありうる。)

2 仲間関係の変質

異質性が認められる peer-group に至るまで、つまり仲間集団が同一であることを絶対的な条件とする gang-group や chum-group においては、仲間集団のメンバーに対して同じであるように同調圧力(peer pressure)がかかることになる。この圧力はきわめて強力であり、大人からみれば異様と思えるほど仲間と同じであろうとする心理機制を生み出す。それゆえ仲間集団が同一であることを絶対的な条件とする gang-group や chum-group においては、同一であることを確認するためのゲーム的な仲間はずし、短期間に順繰りに仲間からはずされていくローテーション型のいじめが起きやすい。けんかなども含めてこうした人間関係のトラブルから子どもたちが学ぶことは、発達上必要なプロセスであるといえよう。こうして同質性を特徴とする gang-group, chum-group から異質性を特徴とする peer-group までの発達過程においては、こうした対人関係のトラブルが起こりやすい。

不幸にも事件になるような「いじめ」は、特定の子どもに対して長期間にわたって固定化し、かつ体への直接的な攻撃をも含めきわめて陰湿な行為となっている。しかも特定の障害を持ったものへの迫害など、どうてい人間関係のトラブルから学ぶなどとはいえないような状態が起きているようだ。同時に全国調査や事件報道からわかるようにその裾野はかなり広がっていると判断せざるをえない。従って、子どもたちの仲間関係の発達には、①gang-group、②chum-group の肥大化、③peer-group の遷延化という3つの変化が起きていると考えられる。

近年では、乳児から集団保育で育つ子どもたちが増えるにつれ、そうした子どもたちの発達が研究されて、子どもは乳児期から集団生活を楽しむ、他の子どもたちから学んでいることが明らかにされてきた。そして、子どもが乳児期から「他の子どもに向かって開かれている存在」(柏木,2008)であることが確認され、あらためて集団の中での子どもが育つことの意義が見直されている。それと同時に「子ども」から「大人」への移行を考えるにあたって、この子ども集団＝仲間関係の存在が大きな意味をもつと認識されるようになってきた。これまで親子関係、とりわけ母子関係に傾いていた発達心理学研究において、今後は乳幼児期からの仲間関係を含めた子ども集団における子どもの発達が注目される。

保坂 亨(2010). いま、思春期を問い直す:グレーゾーンにたつ子どもたち

東京大学出版会,pp121-128

柏木恵子(2008). 子どもが育つ条件. 岩波新書, pp171-176

Sullivan(1953) Conception of Modern Psychiatry. W.W.Norton.

(中井久夫、山口隆訳.現代精神医学の概念. みすず書房),pp278-279